



Title	牧場の四季
Author(s)	斉藤, 博幸
Description	技術部職員研修の研究・技術発表
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 1, 34-37
Issue Date	1994-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35258
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_p34-37.pdf



牧場の四季

附属牧場 斉藤 博幸（環境・飼育系 家畜飼養班）

はじめに

農学部附属牧場は、面積470haを有し、牛200頭（二畜の牛10数頭）馬100頭を飼育しております。季節により動物の頭数に変動があります。これらの動物を管理しているスタッフは、助教授（教官）1名、事務掛長1名、技官の定員7名ですが、現在1名不足の6名で管理しております。このために職員全員に負担が掛かっております。中には腰痛、打ち身などの痛さを我慢して作業している人もいるような現状です。

春

雪が溶け始める2月頃より、牛、馬の分娩が始まります。牛の場合は分娩前にまず異常が無いかを確かめます。逆子であれば早く介助して出さなければなりません。死亡する確立が高いのです。生まれた子牛は翌日、体重（30～40kg）を測り、左耳にタック（No.）を付けます。右耳にはタックを紛失した時にわかるようにNo.を入れ墨しておきます。同時に軽種馬の分娩も始まります。軽種馬の場合は特に気を使います。それは、来年の秋の2才馬のセリ市には高額な金額で取り引きされるからです。牧場の貴重な収入源なのです。そのために分娩の時には宿直者（週1回）は、いっそう気を使います。生まれた子馬も体重、体高、胸囲、管囲を測りさらに特徴（顔、首、胸前、後足内側後方に渦巻が有ったり、無かったり）をチェックします。

この時期は生まれそうな時は宿直者は夜も寝られません（熟睡できません）。この状態でも翌日はいつもどおりの作業をしなければなりません。分娩の終わった馬はおおよそ一週間後に交配します（来年の分娩のため）。この交配の時などは蹴られたりする事もあり、大変に危険です。また、この時期は北海道和種馬の分娩も始まっています。和種馬の分娩時の事故は比較的少ないようです。およそ毎年、牛50頭、和種馬20頭、軽種馬4～5頭が誕生しています。このような作業の間も採草地の暗渠排水堀、整地、化学肥料の散布などの作業と共に、農機具の点検などもやっていかなければなりません。

また、4月中すぎには放牧地の柵の見回り、補修を同時に進めていかなければなりません。5月放牧が可能になった時は牛の体重を測り放牧に出します。同時に種牛も放牧し交配を

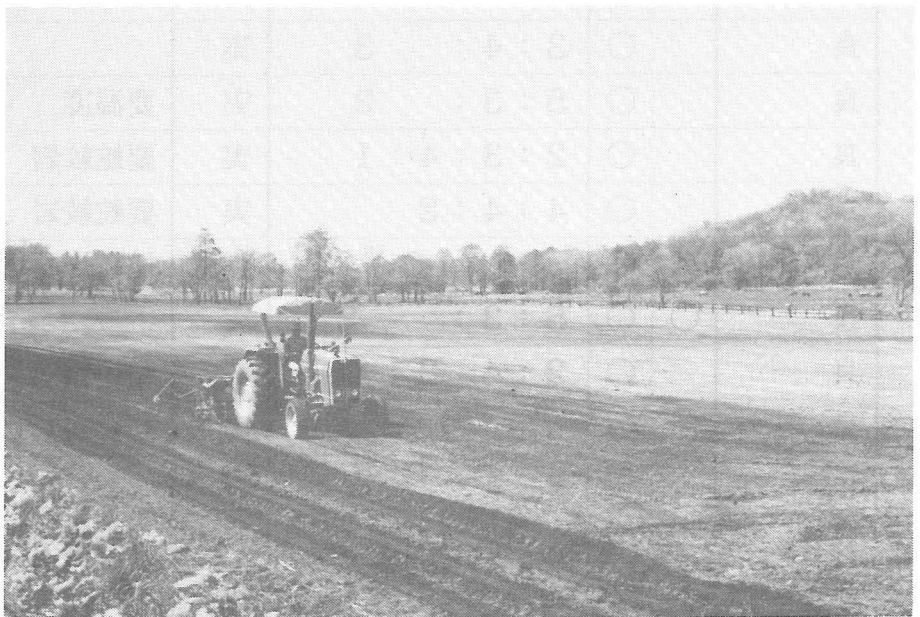


写真1 デントコーン播種の情景

開始します。これは牧牛といって雌牛45頭の中に雄牛1頭を入れ交配する方法です。期間は3か月ぐらいです。放牧後畑では、デントコーンを蒔く準備をします。準備が出来次第デントコーンの播種をします。デントコーンを蒔く人以外の技官は牛舎周りの掃除、パドックの糞尿片付けなどをします。5月も終わり6月からは和種馬の交配開始です。雌馬30頭ぐらいに雄馬1頭を入れ牧馬です。期間は2か月間です。また放牧地では牛や、馬の行動観察を教官・院生が24時間続けてます。

夏

そろそろ草も伸びて刈り取りのシーズンがきます。この頃よりサイロ（高さ16m）の積み込みと同時に乾草牧草作りも始めます。サイロへ入れる草は機械で刈った後、水分調整した草を2cmぐらいに切断してサイロへ入れます。約1週間この期間はサイロの中の状態を見て調整しなければなりませんので、毎日サイロに上がらなければなりません。一方乾草作りでは刈った草をテッターと呼ばれる機械で反転します。天候が良ければ3日間ぐらいで出来ますが、天候が悪ければそれだけ長かかります。私共技官は、動物に少しでも質の良い草を食べさせようと努力しております。

7月も中旬、夏季学生実習が2週間に渡り行われますが、その前に教官・事務官・技官で実習内容などの打ち合わせを数回開きます。期間中は本学部の教官も交代で来てく

れますが、牧場の教官は全日程学生と共にします。実習内容は牛舎作業、牛の見回り、（この期間以外は技官が毎日見回ります）、牛や馬の体重、体高、胸囲、管囲などを計測します（この計測も毎月教官・技官・院生で行っております）。特に、去勢や除角の時などは気を使います。動物が暴れますのでしっかりと固定しなければなりません。とても危険な作業なのです。他に雑草刈り、厩舎作業



写真2 牛の体重測定

の中でロープワークなどもします。後は土曜、日曜に馬の行動観察。乗馬実習は毎日2時間乗ります。実習の最終日には2～3kmの山道を遠乗りして終わります。

学生実習も終わり、この頃昨年生まれた軽種馬の2才のセリ市が開かれます。8月上旬はサラブレッド、下旬はアングロアラブのセリ市です。当牧場でもサラ3頭、アラ2頭をセリ市に出しましたがサラ1頭（850万円）アラ1頭（70万円）で取り引きされました。

秋

二番牧草（夏に刈り取った後の牧草）を収穫しますが半月～1か月ぐらいかかります。乾草も終わり、こんどは春に播種したデントコーンの収穫です。

コーンハーベスターで2cmに切断したデントコーンをトレーラーでサイロまで運んで来ますが、途中トレーラーごと計量します。その後ブロアーでサイロの上まで吹き上げて入れます。その時サンプルを取り水分も計ります。この作業もグラスの切り込みと同様に毎日サイロのに上がり中の状態を見て平にします。平にしておきませんと機械で出すときに困るからです。100t入りのサイロ2本ですので約2週間ぐらい毎日この作業が続きます。早く入れた下の部分からは有毒ガスが発生していますので早く入れてしまわなければなりません。よくサイロの事故がありますが、たいていガスの事故です。

サイロの切り込みが終わり次第、採草地へ来年のために堆肥を散布、来年コーンを蒔く畑を起こします。春～秋までは草のある所へ移牧して来ましたが、青草も少なくなってきたので下牧の準備もします。春から秋まで動物の測尺は毎月やって来ましたが、削蹄（爪切り）も時々しなければなりません。削蹄をしないと足が曲がったり、爪が割れたりします。またその時同時に爪にNaの焼印を押します。これは馬を間違えないようにするためです。和種馬は特徴が少ないからです。また牛も同様に爪を切らなければなりません。爪が長いと歩行ができなくなる牛も出てきます。11月に入り放牧地の草も少なくなり、下牧と共に今までの群れと別に編成変えをします。早く出荷する群、遅く出荷する群によって濃厚飼料の給与量と、期間が違います。春と秋は切り込んだサイレー

ジと飼料を食べさせて肥育して行きます。これらの牛を3月から5月までに3～4回に分けて出荷して行きます。牛が下牧した後、今度は和種馬の離乳です。これは親馬と子馬を引き離す時なので暴れます。これも大変危険な仕事です。親馬はすぐ山へ放牧します。子馬は2～3週間の間牛舎の一部に入れて調教をします。その後放牧に出します。

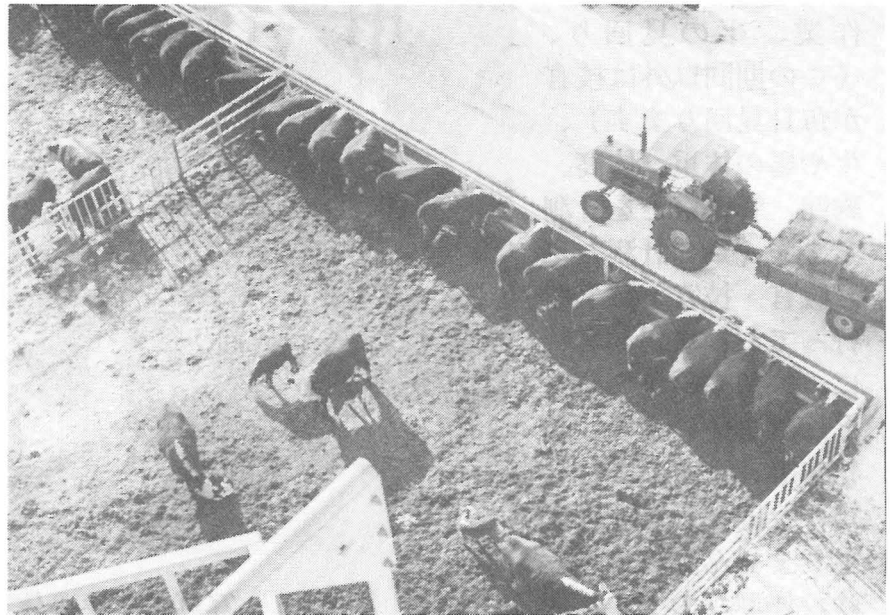


写真3 肥育のパドックのサイロ上からの俯瞰

冬

雪が降る1月上旬、山へ放牧した馬も下牧し、乾草を給与します。2月も中すぎに冬季の学生実習も始まります。その前に3才の和種馬を2日間ぐらい調教し、その後学生に渡して調教してもらいます。落ちて怪我の無いように冬の雪の有る時期に調教する訳です。冬季実習の学生は、夏季の実習にも来ますので厩舎・牛舎の作業もしてもらいます。

実習の最終日には雪の中牧場内の柵の見回りに4班に分かれて行って来ます。

冬季の学生実習も終わり、雪も少しずつですが解けて所々土が顔を出し始め、山には福寿草も芽を出す頃、採草地には鹿も頻繁に出てきて牧草の新芽を食べ始めます。

春

この頃にまた新しい子牛、子馬も誕生してきます。子牛もなかには乳を飲めない子牛や飲ませない親牛もいます。そんな時に技官が介助します。どうしても駄目な子牛は人工哺乳で育てます。今までにこんな事も有りました。1頭の親牛がどうしても飲ませない時に、ちょうど他の牛の子が死亡したためにその親に飲ませない牛の子を付けて育てました。

このように牧場の四季は常に変わって行きます。私共技官はいかなる作業にも対応して行きたいと思います。今後とも牧場の技官の仕事に一層のご理解とご支援を宜しくお願い致します。